



Department of Immunology and Genomic Medicine
Kyoto University Graduate School of Medicine
Yoshida Konoe-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan
TEL: +81-75-753-1371 FAX: +81-75-753-1388

意見書

1) 生命科学における実験の結果と意義の解釈について

生命現象は、数学とは異なり、極めて複雑であり、今日の科学の知識においても全ての事を予測することはおよそ不可能である。また、生命現象は、環境や個体差等、およそ研究者が注意しても予想できない出来事が常に起こることが常識である。このような条件の元で生命科学の実験を行い、その解釈を正しく行う為には、十分な注意が必要である。

2) 一例の実験結果に基づいて何らかの結論を導くことの意味

通常、生命科学の研究結果を発表するに当たって、研究者は何回も反復し、この数が統計的に有意な数にする。その結果に基づいて発表を行うことが生命科学者の常識であり、責務である。もしこれを怠り、一例の結果に基づき結論を導き、発表をした後で、その結果の再現性を得られなかった時には、その研究者は信頼を失う。

捏造の法的定義については、意図的な捏造と無作為の捏造との両方がある。意図的に事実を歪曲する捏造は、誰にも明らかな罪である。しかし、生命科学の研究において、明らかに結論を導くことが不適切である条件下で、例えば「一例に

基づき」結論を出したなどという行為は、生命科学研究者の常識としては、作為の捏造と同等である。

3) HPV ワクチンの安全性について

子宮頸がんワクチンの接種は、国際的に行われており、我が国が先進国では唯一推奨されていないということは、重大な問題を引き起こしている。すなわち、若年者の子宮頸部がんの例数が増えている。このことに対して、小児科学会・婦人科学会は警鐘を鳴らしており、私自身も大変憂慮すべきことだと考えている。

子宮頸がんワクチンによるマスコミ等の主張する副作用との因果関係の有無については、これまで因果関係が認められないという報告が各国から報告されている。因果関係が認められないということは、自然科学としては、無いということに限りなく近い状況である。つまり、ワクチンに全く副作用が無いということを実証することは困難であるが、明確な因果関係が無いということは、科学的に考えて、因果関係を否定するというのが、自然科学の常識であり、今日社会的に受け入れられる通念であると考えられる。

令和元年 8 月 8 日



本庶 佑

京都大学高等研究院特別教授
京都大学大学院医学研究科免疫ゲノム医学講座教授